【499】

氏　　名　石田秀実（いしだ ひでみ）
学位(専攻分野)　博　士（文　学）
学位記番号　論文博第351号
学位授与の日付　平成10年11月24日
学位授与の要件　学位規則第4条第2項該当
学位論文題目　こころとからだ――中国古代における身体の思想

論文調査委員　（主査）教授 池田秀三　教授 興膳　宏　教授 麥谷邦夫

論文内容の要旨

本論文のテーマは，タイトルが示すように，中国古代の心身論である。心身論ないし身体論自体は，古くからあるおなじみの哲学問題である。それをいまさらのように取り上げるにあたっては，それなりの理由がなければなるまい。

その理由のひとつは，この古い心身問題を取り上げた研究が，まだ多いとはいえないからである。先駆的研究は，H.マスペロやV.フーリックなど，むしろ西欧の学者によって積み上げられた観があるが，その後しばらくの間，彼等の研究を深めるような研究は，さほど現われなかった。先駆者の研究に注意を払いながら，その誤りを訂し，成果を引き継いでいく必要がある。

もうひとつの理由は，身体論の豊かな可能性を含み持っていると想定される文化の多くが，非西欧地域に在ることだ。インドや中国，アフリカ，南北アメリカ，中近東などに散在する身体技法の深々とした伝統は，いまだその主要な部分を言語化されることを拒みながら，地下に埋もれている。哲学者の多くは，これら豊かな伝統について知りながら，なぜか西欧の思想を身体論の主要な素材として，自己の言説を築き上げている。ロゴス主義を軸として，ぐるぐるとねじれた回転を続けてきた西欧の思想を，だからこそ逆に，言語ではなく身体の方向から考えてみるのは，確かにスリリングなことであったに違いない。だが，今に伝わる身体技法の極端に少ない西欧の思想的風土の内で，身体に関わる論を築き上げることの空しさは，やはり否定できないだろう。

中国古代の身体論は，南北アメリカやアフリカの身体技法と同じ程か，それ以上に深いものと想定されながら，一方で言語化の努力が積み重ねられてきた点で，それら諸文化と異なる大きな特徴を有している。インドや中近東の身体技法と共に，「語りえぬ領域について強いて語る」努力が，不断に続けられたのだ。身体の技法とは，象徴－記号化作用を媒介としつつ，その識閾を通り抜けようとする試みなのであれば，この努力はあながち空しいものとはいえない。とりわけ中国文化の場合には，シンボル性の強い文字体系，陰陽などの力動的カテゴリー，気の連続的世界観などが形作る，非ロゴス的象徴－記号化作用を介して，身体の技法はインドや中近東とも一味違うユニークなものとなっていると想定される。「語りえぬ領域について語る言葉」を読みこむことによって，どこまでその領域に分け入ることができるか，試みる価値はあるといえるだろう。

中国古代の心身論をテーマとする本論文だが，その作業は，心身論そのものではなく，心身論の言説を形作る言葉の論理や形式を跡づけることから始められている。中国古代の人々が，どのような思惟の形式によって自己の想いを語ったかについて，理解しておかなければ，思わぬ勘違いを犯す可能性があるからである。「思想のフレームワーク」と題した第一章の諸節は，こうした問題意識から書かれている。

まず第一に，中国古代の人々が，自己もその一部である自然について，どのように考えていたかが問われる。人の身体と，それをとりまく環境との双方にまなざしを注ぐ医学のテクストが，ここでの主要な材料とされる。小宇宙としての人の身体にも，大宇宙としての環境にも，「自ずから然る」ような法則性を，歴史の早い時期から見出していることが注意される。

と同時に，そうした法則性を示す環境や身体の内に，「人格的な全体」が意識されていることも指摘される。「気」という概念は，こうした「人格的な全体」と互換的に論じられることが，その特徴のひとつである。世界は，法則性を有する気から成っているのだが，その気そのものは，また同時に「人格的な何か」の位相をも示すものだ。西欧における理神論と，ある程度対比しうるようなこうした思考こそ，中国古代の人々が早い時期から到達しながら，その後長い間に渉ってそこから動くことをしなかった自然認識の基本型を示すものと考えられる。それは「運動する機械」として端的に自然を客体化する程には，合理化を推し進めなかった思想だが，それ故にこそ，自然への畏敬と，更には自然の不可知性，人の認識行為の限界などについての，叡知を失わずに済んだ稀有の思想となったのだと考えられる。

第二節では，こうした不可知性の思想について再確認しながら，人の認識行為そのものについて，中国古代の人々がどのように考えていたかを，その最も洗練された形を示すと考えられる『荘子』のテクストから窺う。知の限界領域について，どのように言表し，そこからどのように直観的な悟入へと進んでいくのかが論じられる。そこには，認識以前に信じられた世界の秩序があることが明らかになる。時代の変化と共に，この直観された秩序は，再び言語に置き換えられ，その結果人の知の浅薄さにすくいとられて，礼をはじめとする世俗の秩序のモデルと化していく。

こうした知の在り方を前提として，第三節では「正しさの基準」をめぐる論が，両漢の際を生きた二人の儒生の生きざまの内に探られる。人の認識の限界性や不可知論によって，合理的思考を明確に枠付け，超経験的事象や相矛盾するできごとを論断することに，桓譚・揚雄という両漢の際を代表する知識人が，どちらも失敗していること，しかしそれ故にこそプラグマティックともいえる強みをも有していることが指摘される。

西欧的な知の伝統からいえば誠に危うい，だが人の知の実情に照らせばなんともすなおなこうした認識の枠組こそが，中国古代の身体論を解読する前提条件である。第二章以下，こうした前提をふまえて，心身論のさまざまな位相が解明される。

第三章では，まず心身一如といった言葉で語られるような中国の心身認識が，具体的にはどのような身体のイメージに基づいて論を立てているのかが検討される。五臓を宿り場として，身体全体に拡充するような心の在り方をイメージすることによって，心と体とを分節された二元としてとらえながら，なお連続的にとらえるユニークな「気の心身論」の特性が開き示される。認識の基礎にある気の役割り，表層の意識を否定的にとらえ，無意識的の更に奥底，「神」のレベルにおいて認識を透明なものとしようとする方法論などについても触れた。

第二節は，こうした身体論の具体的な形のひとつを，後漢期の代表的な知識人である王充のテクストの内に探るものである。

第三節では，三尸七魄という，これまで民俗学的な興味から論ぜられることの多かった概念のユニークさを，身体論の文脈から探っていく。心の裏面を象徴する「体内神」としての三尸七魄は，人という存在の限界と矛盾を体現するものである。と同時にそれは，第一章で論じた自然のとらえ方，すなわち法則性と人格性との二方向からの認識，のひとつの典型をも示すものでもある。

第三章は，こうした心身認識を前提として，人の生病老死の過程が，どのようにとらえられているかについて論ずるものである。気の身体がどのように男女両性から生じ，どのようなプロセスを経て五臓六腑十二経を形成して，魂魄志意神を備えた人の身体として産まれてくるのかが，馬王堆出土の『胎産書』と，その後代に承け継がれた諸資料に基づいて検討される。流れる身体として記述されるそうした身体生成のプロセスにおいて，場を形成する身体と，本質である流れる身体とが，どのような先後関係で生ずるのか，そうして生まれた嬰児のイメージが，『老子』にはじまる道教の諸テクスト，体内神思想，内丹などに，どのような影響を与えているのかなどについても，初歩的な検討がなされる。

この身体生成過程を，映画のフィルムを逆回転するようにして辿りなおすのが，第二節の老化についての論述である。医経を主なテクストとして，中国古代の老化認識を探ると，形骸自体の再生や不老といった可能性については，余り積極的に語られていないことが分かる。身体の本質としての気の流れについて，その枯渇が，五臓六腑をその場として記述されるばかりである。もっとも逆にいえば，失われていく気の流れを止め，補うことに，老化の防止と若返りの技法を探っていってもよいわけである。

第三節では，気の身体にとって死とはどういうことかが問われる。気の位相変化のひとつとして死があること，気が散開していく死の長いプロセスを前提として，死をみつめ続ける気の生理学のまなざしがあることが示される。それは現代の生物医学が提案する脳死や死の瞬間といった，ドライな死の定義とは別の，最後の気の流れが身体という場を立ち去る瞬間ま

で，死を凝視し続ける「プロセスとしての死」を主張するものである。

医経の立場にもかかわらず，養生と生病老死を超えた在り方は，中国古代から注目されてきた。第四章では，気の身体の有限性を延ばし，あるいは越えようとする思考の実情を探る。第一節では，馬王堆漢墓から出土した養生関係の資料から，房中と養生とを結びつける中国古代のユニークな養生の在り方が検討される。気の身体の有限性を補い，ひいてはそれを超越するために，生の根源にある「産みのエネルギー」をどのように活用し摂りこむかという問題である。生の豊饒儀礼を中心に置く初期道教教団の在り方を探る糸口も，そこには見出すことができる。また，従来「在るものから成るものへ」といった歴史的変遷があると説かれていた初期の僊観についても，問題があることを指摘しておいた。

第二節は，そうした養生観の後漢代における実情を，王充のテクストの内に探る。ほぼ『内経』などに見合うような医学理論を前提として，王充という「合理主義者」が，どのように医学や養生，更には超越的な生の在り方と向き合っていたかが論ぜられる。

第三節は，ややおもむきを変え，後漢から更に後の南北朝期を代表する医書，『小品方』の，日本で発見された断簡を主なテクストとして，この時代の医学・養生思想について概観する。北宋期に再編集された医経群が，どの程度古い時代の医学を伝えているか，南北朝期の知識人が，どのように身体をとらえていたか，といったことどもについて，新発見のテクストを素材に再検討しようと試みたのである。

第四節は，『荘子』大宗師篇に見える「踵息」という概念をてことして，中国古代の特異な呼吸法と，それを支える生理学について再構成を試みる。そうした生理学が，内丹や坐禅内観のような，中国中世に発達したユニークな身体技法を支えていることが闡明されていく。

さて，どの社会にも，ノーマルな生の傍らに，アブノーマルと認識されるような生の在り方がある。とりわけ精神的な正常さからの逸脱である「狂」の概念は，中国古代にあって独自の色合いを帯びている。正常さからの逸脱が，ある種の肯定の相において語られるからである。ユニークな文化的事象としてのみ語られがちであったこの狂概念は，身体論的にみると，どのような根拠があるのだろうか。第五章は，こうした問題を扱う。それはまた，西欧の「理性」にあたるような概念の中国的形を，逆照射しようという試みでもある。

医経や先秦諸子，『史記』などを読み解く第一節は，そうした狂概念の基本形を探るものである。連続的な気の世界観のもと，狂はデジタルな断絶の相ではなく，正常者とアナログ的につながる連続の相の内にとらえられる。病因と病理も明確に記述され，狂は原則的に治療可能な病として位置づけられる。他文明の古代医学と比較しても極めてユニークな，現代的といってもよいほどのこの精神疾病観を前提として，狂概念の肯定的な位相，たとえば芸術的な領域での狂の評価や，理性的と非理性的との連続的とらえ方，心のさまざまな在り方の肯定，などがなされているものと考えられる。

第二節は，唐の孫思邈という大医学者によって著わされた『千金要方』・『千金翼方』という二大著をテクストとして，中世における精神疾病認識の実情をトレースする。心と体の相関上に，健常者とアナログ的に連続するような精神疾病観を築いた中国文明は，憑依の結果と考えられるような精神疾病についても，同様な気の心身論の線上に論を展開していることが示される。憑依する人格的な何かが，同時に「邪気」としての「気」の位相をも示しうるような気の思想の思惟構造が，ここでも問題となる。それはまた，そうした思惟を共にする共同体の存在を前提として，気と二重映しになった人格的他者を憑依者の身体から逐う，という治療法にもつながっていく。ある共同体の中で，「狂う」とはどういうことか，という重い問題を喚起するこうした思惟の内に，現代の私達が抱える狂の問題も内在しているのだ，といえよう。

最終章は，気の思想の美学について触れた後，再び言葉と身体の問題に戻る。第一節はいくつかの音楽起源説話から，気の音楽論の諸パターンを分け，それを身体論的に検討する。音と音楽とをどのように聴くか，何が美とされるか，といった問題である。同じ気の音楽論に基づきながら，感情の平衡を美とする立場と，感情の極端な傾斜を美とする立場との異なる考え方が見出される。連続的な気概念に基づくこうした美学は，狂と中庸との双方に価値を見出すような思考法と響きあうものである。

最終節は，気の思想にとって，言葉による認識とはどのようなものかを，身体論的に問うものである。これは第二章で論じた虚心の認識論について更に深く検討し，とりわけそれが荀子のような先秦思想の集大成者によって，どうまとめられていくかを検討するものである。

篇末に四篇の書評を付す。これはまさしく付け足りではあるが，他者を論ずることによって漸く表出することのできる私

自身の立場というものがあることを，知っていただければと考えてのことである。

論文審査の結果の要旨

1980年代に入ってよりこのかた，中国思想史はその研究領域をとみに拡大し来ったが，近年とくに活況を呈しているのが科学思想の分野である。そしてその中でも，東洋医学や術数学の再評価，さらには気功等の養生術の流行とも相俟って，とりわけ注目を集めているのが医学思想であり，この分野に関する論考・著書はすでに多数に上っている。しかしながら，それらの著作を通覧するに，その大方は漢方医学や本草学あるいは鍼灸術などの治験的側面を主たる内容・関心事としているものであって，思想的研究を標榜しながらも，思想を論ずる部分は実質上その理念的修飾にすぎないものが少なくない。またその思想の理解の仕方も，一般的通念・常識に安易によりかかったものが往々にして見られる。一方，従来の思想研究者が医学思想を取り上げるときには，医学的知識に乏しいため，具体的な医術と遊離した観念的論議におちいっている場合が大半である。したがって，十全なる医学思想研究をなすには，思想研究に関する本格的な力量を備えるとともに，医学的知識も豊富に有していなければならないのであるが，遺憾ながら現況ではその条件を満たす研究者は極めて少数と言わなければならない。

本論文の著者はその稀なる研究者の一人であり，これまでに多くの論考や著書を発表し，中国医学思想研究の新たな地平を切り開いてきた。本論文は，それらの論考のうちから，題目にあるごとく，「こころ」と「からだ」に関する論考を集成したものである。

本論文のテーマは，いまも言うとおり，中国の伝統医学における「こころ」と「からだ」の問題，すなわち中国古代の身体論ないし心身論である。あえてこのような旧套的ともいえるテーマを設定するのは，論者によれば，次の二つの理由からである。その理由の一は，旧套的な主題であるにもかかわらず，中国哲学の領域においては，実際には意外なほど身体論的研究が稀少なこと。

もう一つの，そしてより主たる理由として，論者は次のごとくいう。中国医学は西欧的ロゴス主義に属さぬ身体技法を数多保持すると同時に，他の非西欧的身体技法を有する諸文化とは異なって，それを言語化することに多大の努力を積み重ねてきた。まさにそこに中国の身体論の独自性が存するのであるが，それはまた西欧の思考法と著しい対比を見せる中国の伝統的思考法の現れにほかならない。それゆえにまたこの身体論は，理性主義的な排除の原理によるものとは異なる新たな身体論の未来を開く可能性があるのではないか。

西欧哲学に対するこのような論者の概括が正当かどうか，幾分の疑念がないではないが，身体技法と言語という両面設定は，思想と医学双方に造詣の深い論者ならではの独創的視角であるとともに，中国医学思想の考察にはまた極めて有効な方法であることは認められて然るべきものと思われる。

かかる問題意識のもとに，論者が見出した中国の伝統的思考法とは，言語化（象徴－記号化）し得る経験則の世界と言語化不能の不可知な世界とを峻別し，不可知な世界は不可知なものとして判断を停止する合理主義，およびそれにもとづく複眼的思考であった。そして論者は，そのような合理主義的立場にもかかわらず，いや，むしろそのような合理主義的立場に立つからこそ，中国の身体観ならびにその基底をなす自然観は，不可知な世界にこそ真の調和性が存在するとのア・プリオリな信仰に根ざしているとみる。

このような合理主義や複眼的思考，あるいは自然に対するア・プリオリな信仰については，ほぼ論者の主張のとおりと認められる。ただそのことがら自体はこれまでにもよく論じられていたものであり，その限りでは新説ではない。しかし，それを医学（中心は運気論と経絡説）の方面から考察・検証したものはかつてなく，この点はまさに論者の功績であり，また同時に本論文の最大の成果でもある。

また天人相関論における機械論と人格的主宰神との同居について，それを単なる方便もしくは思想的未成熟による矛盾とみなす従来の見方を否定し，機械的法則である「全体としての自然」が同時に「人格的全体」でもあることを論証して，これまで天人相関論につきまとっていた困難を解決したこと，およびそこからさらに進んで，自然現象としての気に天（祖神）に由来する人格性が共存していることを指摘し，それを中国的理神論として提唱していることも卓見との称賛に値しよう。

その他，王充の疾病観における硬軟二種の二元論の混在の指摘をはじめ，論者の創見は随処に見えているが，逐一の紹介・

評価は省略する。ただ，次の一点は特記しておく必要があろう。

それは，前述の主題設定の理由からもうかがえるように，論者の関心は伝統医学に止まらず，精神疾病者への差別観，高齢者医療，脳死などの現代の医学的問題にも鋭い眼差しが注がれていることである。その問題意識は本論文全体に貫かれており，それが本論文に独特の光彩を与えるとともに，読む者に自省を迫る強い緊張感をもたらしている。身体を気の流れる場（流れる身体）ととらえ，生老病死のプロセスを解明する第２章，中でも，五臓すべてに「こころ（神）」が宿ると考える気の思想においては，臓器移植のような考え方は原理的に成立し得ないと説く「死までのプロセス」（第３節）や，気のアナログ的変化を強調する伝統的医学書では，精神疾病は気のバランスの崩れによって生じるにすぎないとされ，精神疾病に対する差別的排除意識はほとんど見られないことを指摘する第５章「狂の身体論」などの諸論には，とりわけその特色が現れている。

ただし，本論文にプロパガンダ臭があるわけではむろんない。論者があくまで実証的・客観的に論を進める態度を堅持していることは言うまでもなく，全体としてはむしろ手堅い文献学的論文との印象を受けるほどであり，したがっておおむね説得力にも不足する点はないが，背後に潜む論者の問題意識は何人にも鮮明に感取されるであろう。かくのごとき論者の姿勢は，東洋医学を取り巻く現在の状況からして当然のことと言え，むしろ高く評価すべきものと考える。

以上述べたごとく，本論文は医学的考察を通して中国古代における身体論，さらには自然観を闡明しようとした斬新な意欲作であり，また数々の新たな知見をもたらすことにも成功した力作と評し得よう。

もとより，本論文にも改善の余地や欠陥がないわけではない。問題点としてまず挙げられるのは，資料の解釈に強引さが感じられる部分がいくつかあることである。これは医学書という資料の特殊性と難解性に起因することであり，またはっきり論者の誤読と思われる若干の例を除けば，そのほとんどは論者の解釈が誤りとは断定できないものなのであるが，一方論者の解釈が絶対正しいとも認定しがたい場合も僅少とはいえず，論者の解釈の正当性をより高めるためにも，他の解釈の可能性にもさらなる配慮が望ましかった。とくに従来の読み方と異なる読みを提示する場合には，より慎重な態度が必要であろう。

また，論者の引用する原文資料はしばしば通行本とは字句が異なっている。ところがどのテキストを用いたのかが明示されていないばかりでなく，字句の異同の注記もほとんどなされていない。その事例の大半は論者の校訂によるもので，改訂自体は根拠なきものではないが，そのことは当然注記しておくべきである。この点は学術論文の体例として不備と指摘せざるを得ない。その一方で，本文の理解に必ずしも関わらぬなくもがなの注記がやや目につく。全体にわたって誤記や誤植がかなり目立つことや，前後の記述に齟齬するところが数箇所あることともあわせ，論者には論文のスタイルについてもより丁寧な配慮をされるよう注意を促しておきたい。

しかし，かくのごとき問題点や不備を有するとはいえ，それは本論文の内容的価値を根本から損なうものではない。本論文が中国医学思想研究を大きく飛躍させた画期的業績であることに疑問の余地はない。

以上，審査したところにより，本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。1998年９月８日，調査委員３名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果，合格と認めた。